

令和5年度 居場所づくり・絆づくり調査研究実施報告書

【六戸町立六戸中学校区】

学校名	校長・氏名	担当者職・氏名
六戸町立六戸小学校	校長 山内 亮悦	教頭 中村 大介
六戸町立六戸中学校	校長 秋元 辰一	教諭 澤目 幸治

I 校区の概要

校区は、六戸町の南部に位置する。一面平坦な地形で形成されており、目立った高山・湖沼はない。十和田湖を源流とする奥入瀬川が東西に流れ、流域には農地が広がり積雪は多くなく年間を通して穏やかな気候である。六戸町の主産業は、かつては農業を主とする第一次産業が主産業だったが、現在は58%がサービス業等の第三次産業が主産業となっている。

校区の児童生徒は、道徳性や規範意識が高く、教師の指導を素直に受け入れる。また、労を厭わず勤労に励む良さをもちながらも、他者と協力し合いながら取り組むことや将来に夢や希望を持ち、その実現に向けて努力すること、その後ろ盾となる自己肯定感に弱さがある。また、自分も他者も大切にし、誰とでも良好な人間関係を築こうとする自他肯定感が不足している。このため、将来の目標を定め、しっかりとした目的と強い意志を持って学習に取り組む児童生徒を育成するとともに、友好的に他者や社会と関われる児童生徒を育成することが課題である。

本町は、2025年(令和7年)4月には、町内5つの小中学校を1つに統合し、「町立義務教育学校 六戸学園」として開校する予定である。これまで開校準備のために、多くの時間を費やしてきたが、小中・中中の連携についても活発に行われている。

校区では、以下の3つの項目を重点化し、教育活動に取り組んでいる。

1 学力の向上

- (1) 日常における探究型授業の一層の推進・充実
- (2) 主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善
- (3) よりよい学習習慣の育成を図る工夫

2 豊かな心の育成

- (1) 道徳教育の充実
- (2) 全教育活動における生徒指導の三機能を生かした指導
- (3) 諸問題解決のための話し合い活動の設定

3 信頼される学校づくり

- (1) 学校運営協議会を通じた地域との連携
- (2) 各種アンケートや保護者面談を通じた教育改善
- (3) 小中及び中中連携による教育課題改善

II 研究の概要

不登校やいじめを未然に防止するためには、全ての児童生徒が安心・安全に学校生活を送ることができ、規律正しい態度で授業や行事に主体的に参加し、活躍できる学校づくりを進めていく必要がある。そこで、本中学校区を研究指定校とし、新しい不登校児童生徒を生まない「魅力ある学校づくり」に取り組む。

そのための研究方法として、下記を意識して取り組む。

- ① 児童生徒が安心でき、自己存在感や自己肯定感を感じられる場所をつくり出すこと。そうした教職員による「居場所づくり」を進めること。
- ② 主体的で協働的な活動を通して、児童生徒自らが「絆」を感じ取り、紡いでいくこと。「絆づくり」

を進めるのは児童生徒自身であり、そのための働きかけを教職員が行うこと。

- ③ この取組を効果的に進めるためには、全児童生徒の意識を定期的に把握し、取組の浸透度を全教員で共有し、取組内容を改善していくことが必要だと考える。そこで、年4回の意識調査と教職員が実施すべき「居場所づくり・絆づくりプラン」をもとに、取組を評価・改善していくPDC Aサイクルで研究を進める。また、居場所づくりと絆づくりの2つのねらいを常に意識し、あらゆる教育活動の場においてバランスよく取り組むよう努める。

1 すべての児童生徒に対する取組

不登校を未然に防止するために、児童生徒が学校に行きたいと感じられるような魅力ある学校づくりを進める。

- (1) 探究型授業において「How to 型の課題設定」、「振り返りの充実」を通して、主体的に学習に取り組む姿勢を育成するよう努めた。また家庭学習では、個に応じた細かな支援をすることで、学習習慣や学習内容の充実を図っている。
- (2) 学校行事において、集団で取り組む活動の中で、児童生徒一人一人に役割を与え、行事後に互いの頑張りを認め合う活動を行う。具体的な事項として、キャリアパスポートを学校行事とリンクさせ、事前・事後の記入票に学級担任が講評を加えた物を掲示し、全校で「思い」の共有化を図っている。
- (3) 「居場所づくり・絆づくり」の視点で行われる全ての教育活動を写真に残し、生徒会スローガンの下に掲示するなど、活動の足跡を確かめ合う掲示活動の充実を図っている。
- (4) 生徒の実態把握のために、毎月「いじめ0の日」を設定し、いじめアンケートを実施する。アンケートには、いじめの有無だけでなく、個々の悩み等も記入する欄を設けた。また、いじめ防止対策委員会においては、学校の対応について委員から意見聴取を行っている。
- (5) A S S E S S (アセス) やQ-Uを実施し、児童生徒の状況を共通理解した上で教育相談を行っている。中学校では、教育相談をする教師を希望制にするなど教育相談のやり方も工夫して行っている。

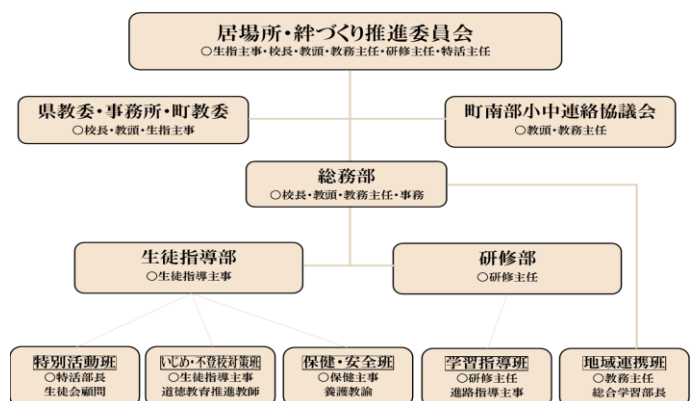


2 不登校支援としての取組

- (1) 保護者との連絡を密にするとともに、定期的な面談によって児童生徒の状況を確認して対応している。
- (2) 適応指導教室への通室やSC、SSW、町福祉課を含めたケース会議を実施するなど、関係機関と連携して児童生徒個々が抱える問題の改善に取り組んでいる。
- (3) 欠席等が目立つ児童生徒においては、家庭訪問や電話連絡をこまめに行い、児童生徒本人や家庭の困り感の把握に努めるとともに、学校とのつながりを絶やさないように努めている。
- (4) 教室への登校や集団での学習に不安がある児童生徒に対しては、保健室や別室での学習を促し対応している。また学校行事に別室で参加できるよう、リモート（遠隔投影）を行っている。

3 校内体制の整備について

- (1) 中学校においては、「居場所づくり・絆づくり推進委員会」を組織し、特別活動班、いじめ・不登校班、保健・安全班、学習指導班、地域連携班の5つの班を編制し、全教職員の協働指導體制で取り組んでいる。
- (2) 行事において、参加意義などの目的を明確にするために、ガイダンスを実施した。また、生徒指導主事と生徒会顧問との連絡を密にし、最高学年を中心とした組織作りと委員会活動の役割を見直して行っている。



- (3) 授業においては、研修主任を中心として、年2回の校内研修会、年2回の相互授業参観、道徳の授業の相互参観や学級担任以外の教員が行う特別の道徳授業など、校内研修の充実に取り組んでいる。また、六戸町学力向上推進委員会による「六戸式授業づくりスタンダード」を共通理解し、指導方法の徹底を図っている。
- (4) 不登校の児童生徒について、FKT（不登校対策チーム）を組織し、複数の教員で関わる対応を行っている。

4 小中・小小・中中連携の取り組みについて

- (1) 小学校5、6年生と中学校の全生徒が協働し、学区の清掃活動を行っている。中学生が児童の手を取りながら安全に配慮して清掃活動を行うことで交流を深めている。
- (2) 小学校5年児童を対象とした学習会に、中学校3年生が参加して指導補助を行っている。解答の板書や個別指導などの場面で交流が図られている。
- (3) 同じ六戸町の七百中学校1年生と本校1年生が協働し、町の公園内にある沼の整備などのビオトープ活動を行い、令和7年度の義務教育学校開校を見据え、交流する機会を設定している。
- (4) 新年度の入学予定児童とその保護者を対象にし、中学校への入学予定者説明会を実施している。
- (5) 中学校の教員が小学校6年生を対象に授業への乗り入れ指導を行っている。令和4年度は、音楽で中学校の校歌指導、保健体育で、長縄跳びによる体力づくりの授業を行った。令和5年度は、技術科教員が小学校6年生を対象とした図工の物づくりを行う予定である。
- (6) 町スポーツ交流会として、町内3つの小学校児童によるドッジビー大会を行っている。令和7年度を見据えて4年生以上の学年が交流する機会を取り入れている。

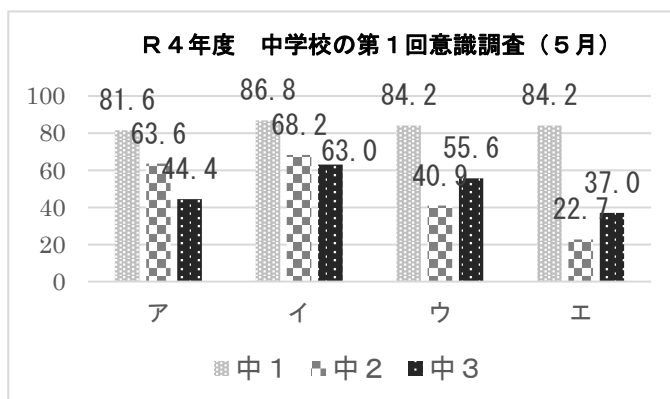
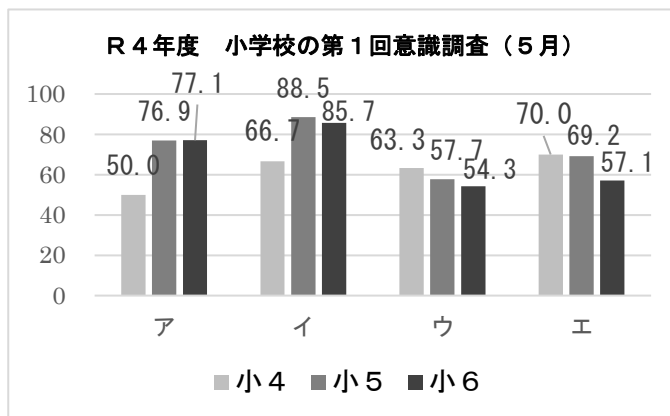


Ⅲ 1年目の研究

1 重点項目の設定

令和4年5月の小学校の意識調査では、「ア 学校が楽しい」、「イ みんなで何かをするのは楽しい」、「ウ 授業に進んで取り組んでいる」、「エ 授業がよくわかる」という4つの観点において、全ての項目で「1 あてはまる」と答えた児童が50%以上おり、大変高い数値だった。そこで、最も低い観点「ウ 授業に進んで取り組んでいる」を重点項目に設定し、数値目標を75%に設定した。そのために、グループやペアで話し合う機会を設け、自信をもって発言できるようにすることや、見通しをもって活動させたり、到達目標を設定し、達成感を味わわせたりする指導を行った。

中学校では、学年ごとにアンケート結果に大きな開きがあり、特性の違いがわかった。どの学年でも最も数値の低い観点を重点項目に設定することとし、1年生では、「ア 学校が楽しい」、2、3年生では、「エ 授業がよくわかる」とした。そのために1年生では、これまでも行っていた行事後に互いの頑張りを認め合う活動や他者の成果と課題を共有



して、集団を高めようとする態度の育成を図った。2、3年生では、授業において課題の理解や問題解決を図るグループ活動の充実を図り、探究型な学習に努めることとした。また、学習内容の定着を図る振り返り時間を確保し、定着が弱い生徒には、丁寧に指導するなど個別指導を行った。

学校行事においても、今までも行っていた集団で協働する活動場面を意図的に取り入れ、生徒同士の絆づくりを図った。特に運動会では、コロナ禍で実施できなくなっていた応援合戦を競技に復活させたことで、生徒同士の一層の絆づくりにつながった。

2 先進校視察研修会

令和4年11月、宮古市の先進校2校を視察し、授業参観や事業の取組等の説明を受けることができた。また、助言者である岡山大学大学院教育学研究科 准教授 高橋典久氏からご講義を頂戴した。

演題「中1ギャップを防ぐ小中接続」として、次の点が特に参考となった。

- ① 不登校は行事のなくなった3学期に増加することから、授業の中でどれだけ「居場所づくり・絆づくり」ができるか。
- ② 「学校魅力」をつくり出すためには、「授業改善+行事改善」であり、学習指導と生徒指導の両輪で取り組むことが大切である。
- ③ 調査データも大切であるが「子どもの声を聞く」ことが大切であり、学校区で重点項目を1つに絞るべきである。

上記を受けて、5年度への改善点とすることとした。



《宮古市立西中学校での研究会》



《講師の助言を受けながらの演習》

3 学区研修会

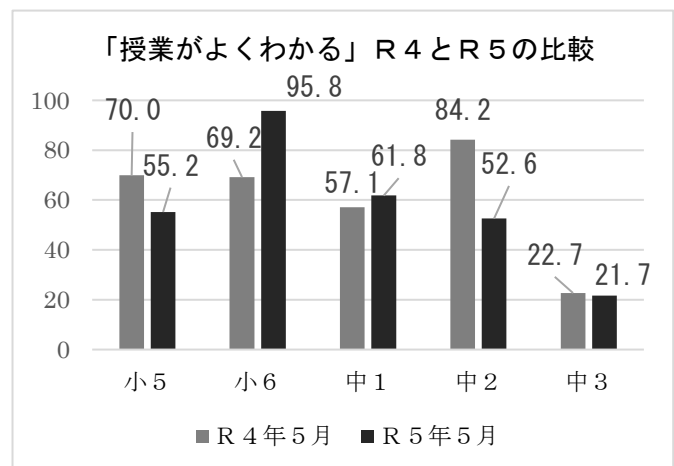
令和5年1月、秋田公立美術大学 副学長 毛内嘉威氏を招いて、講義及び演習を行った。演題『道徳科における「主体的・対話的で深い学び」のある授業づくり』として、道徳教育の在り方や道徳における見方考え方等について講義・演習を行い、教員の組織的対応力と指導力の向上が図られた。

IV 2年目の研究

1 重点項目の設定

4月、新しく赴任してきた教職員を交えて、2年目のプラン及び年間目標達成への手立て（I期）を昨年度の反省を元に作成した。小学校、中学校の全学年ともに重点項目を「エ 授業がよくわかる」に設定した。

5月の意識調査では、小4：65%、小5：55%、小6：95%、中1：61%、中2：52%、中3：21%という結果であった。この結果を元に、小学校では目標値を75%に設定し、中学校では中1：65%、中2：55%、中3：50%に設定した。



2 重点的な取り組み

- (1) 1年目からの重点である下記を継続する。
 - ① 「日常における探究型授業の一層の推進・充実」
 - ② 「主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善」
 - ③ 「よりよい学習習慣の育成を図る」
- (2) 小学校では、昨年度の取組を継続することとし、授業においてグループやペアで話し合う場面を設定し、自信をもって発言できるようにすること。また、到達目標を設定することによって、活動に見通しをもたせ、達成感を味わわせるよう指導の工夫に取り組んでいる。
- (3) 中学校では、授業規律の徹底を図るために、3分前無言学習や活動の切り替えを意識させることで、生徒が安心して授業に取り組める環境づくりを行っている。
- (4) 「六戸式授業づくりスタンダード」に基づいた授業実践を継続する。
- (5) 家庭学習の充実のために、家庭学習の手引きを全家庭に配付するとともに、手引きを用いたガイダンスや家庭学習コンテストを実施することにより、生徒の家庭学習に対する意識の向上を図った。中でも家庭学習コンテストは、小中ともに実施している。
- (6) 授業力向上のため、社会と理科の校内研修会の実施や年2回の相互授業参観を行った。社会の校内研修会では、知識習得型の授業を対話的な活動を取り入れて行った。また、理科の校内研修会では、導入を工夫し主体的に対話的な活動場面で課題解決の意欲につながるという仮説検証を行った。
- (7) 小中ののりしろ（つなぎ目）を意識してハンドサインを用いた授業コーディネートを意識して取り組んでいる。
- (8) このほか、昨年度からの継続である学校行事における集団で協働する種目・演目の設定や事前・事後でのキャリアパスポートの利用、掲示活動の充実、小中・中中連携の充実などに取り組んでいる。

V 成果と課題

1 成果

- (1) 六戸小学校
 - ① グループやペアで話し合う機会を設けたことにより、意見や考えを発言しやすい雰囲気となり、活動意欲の高まりが見られた。
 - ② 到達目標の設定や見通しを持たせる活動、振り返りの時間の設定によって、達成感が見られた。
 - ③ 学習成果の掲示や善行の紹介によって、児童の自己肯定感の向上を図ることができた。
 - ④ 結果として、「授業がよくわかる」の目標値75%に対して小4は92%、小5は78%、小6は127%の到達度となった。

令和5年4月1日

六中 授業づくりのスタンダード

- 1 導入（主体的な学び）

「How to型」「Why型」で課題解決の意欲を持たせる。

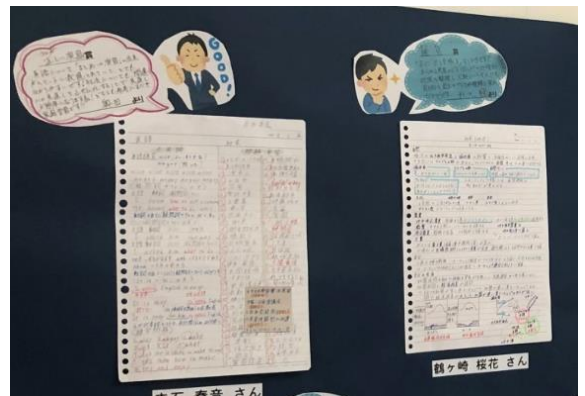
 - (1) 前時の復習は短く、長い時間はかけないこと。（5分程度）
 - (2) 「どうすれば～」「何を通して考えれば～」「なぜ～だろう」など、課題解決の意欲を持たせること。
 - (3) 生徒に課題解決意欲を持たせるために、動機付けが重要となる。そこで平素から、個々のつまずきなど、生徒理解に努めること。
 - (4) 毎時間同じ場所に提示し、**意見の見える化**で囲むこと。
- 2 展開（探究的な学び）

生徒に考えさせる「対話的」な学び合いの場の設定

 - (1) 解決のための「見通し」を持たせ、ゴールを示すこと。
 - (2) 必要な条件や情報を調べさせたり与えたりすること。
 - (3) 予想した結果や考えの根拠となる事柄を個人でまとめさせること。
 - (4) ペアやグループ学習の場を設定し、意見の交流を図ること。
- 3 まとめ（振り返りの時間の確保）
 - (1) わかった事を整理し、分析（考察）すること。
 - (2) わかった事や感じたことの発表の場を設定すること。
 - (3) 自分の考えや解決方法で、改善や参考となることを記録させること。
 - (4) 学習のまとめは**赤色の見える化**で囲むこと。

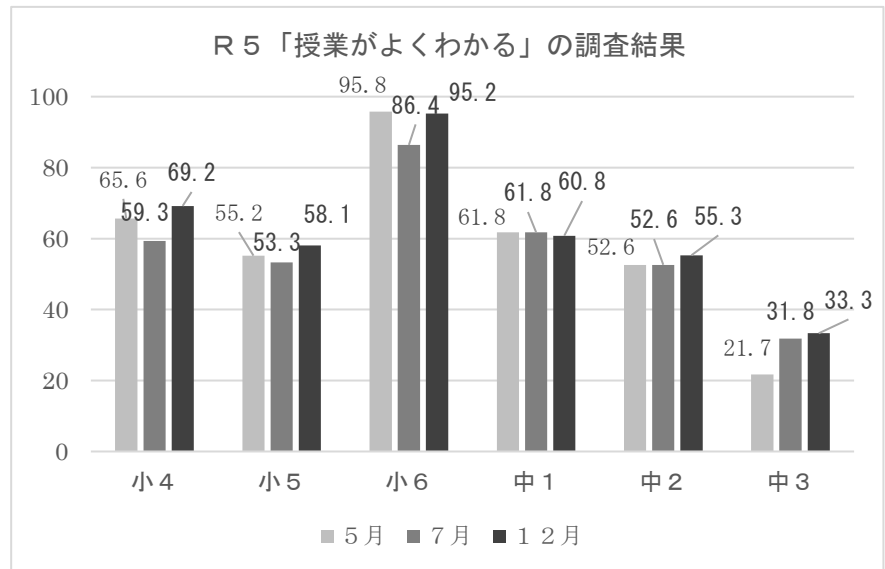
導入 「How to型」の課題 ○学習課題の明示 ○学習の流れを説明 ○意欲を持たせる工夫	展開 「対話的」な学びの場 ○課題解決の見通し ○個々の考えの明確化 ○意見交流	まとめ 「振り返り」 ○整理・分析（考察） ○発表の場 ○学習のメタ認知
--	---	---

- 4 ノートづくりの充実
 - (1) 「**笑顔復興！は真意**」で囲む。
 - (2) 自分の考えは鉛筆、**気持いい事や教えてもらったことは真意**で記入する。
 - (3) 「**人と人のつながり**」で囲む。
 - (4) 改善や参考となることから（感想を含む）を必ず記入させる。



(2) 六戸中学校

- ① 推進委員会を組織したことや研修会・伝達講習会の実施によって、職員の取組に対する理解と協働体制が構築された。
- ② キャリパスポートの活用や掲示活動の充実によって、生徒一人一人がもっている「思い」の共有を図ることができた。
- ③ 教師による授業改善が進んだ結果、各教科授業評価に大きな向上が見られた。(全教科90%以上が「あてはまる」と回答)
- ④ 家庭学習ガイダンス・コンテストによって、家庭学習の重要さと模範を広げることができ、ノートの使い方にも好ましい変化が見られた。
- ⑤ 結果として、「授業がよくわかる」の目標値(中1:65%、中2:55%、中3:50%)に対して中1は94%、中2は101%、中3は67%の到達度となった。



2 課題

(1) 六戸小学校

- ① グループやペアでの話し合いで、自分の考えをもってはいるものの、発言に消極的になってしまう児童も見られた。今後は児童個々の向上に目を向ける必要がある。
- ② 到達目標の設定や見通しをもたせる活動によって全体的な達成感は見られたが、基礎基本の定着につながらない児童も見られた。今後は、振り返り時間をしっかり確保し、一単位時間での学習内容の定着を図る必要がある。
- ③ 学習成果の掲示や善行の紹介によって児童の自己肯定感の向上を図ることができたが、全ての児童に目を向けた自己肯定感の向上に取り組む必要がある。
- ④ 目標値に対する成果の学年もあれば、到達度70%程度の学年もあった。今後は、成果のあった学年の指導に学ぶべき点を明らかにし、指導力の向上に努めたい。

(2) 六戸中学校

居場所づくり・絆づくりの調査研究事業を通して、職員の共通理解のもと、生徒の「居場所づくり」を進めてきた。新型コロナウイルスが5類に移行してこれまでの行事や活動を取り戻すことはできたが、生徒自身が人と関わる経験が少なく、人との関わりに苦手意識をもっている部分もあったことから、以前に比べて「絆づくり」ができていなかったように思う。そのような生徒に対して、我々教職員が様々な角度から手立てを講じていくことが大切であり、より「生徒の声」に耳を傾けて行くことが重要になっていると感じている。

- ① 今回の事業に対する共通理解と協働指導体制が構築されたと感じるが、このようなチームとしての取組は、今後も教育活動全般において意識されるべきと感じる。
- ② キャリパスポートの活用によって「思い」の共有と学級担任との絆が深まったが、今後は家庭とのやり取りも必要であり、生徒個々の育成を学校と家庭が協働して行う必要がある。
- ③ 授業評価は、全教科において90%以上が「あてはまる」と回答されたが、本調査との不整合があることから、授業改善の手がかりとなる事項を大切にしていきたい。
- ④ 家庭学習コンテストによって、家庭学習の重要さと模範を広げることができたが、今後は計画的に複数回実施し、習慣化を図る必要がある。
- ⑤ 目標値に対する成果の学年もあれば、到達度60%程度の学年もあった。今後は、成果のあった学年の指導に学ぶべき点を明らかにし、指導力の向上に努めたい。

3 調査研究のまとめ

(1) 六戸小学校

2年目となる今年は、「エ 授業がよくわかる」を重点に取り組んできた。交流活動や個の意見を大切にする学習の進め方をしたところ、思いや考えを書いたり発表したりすることに自信がもてるようになってきた様子が見えてくる。

現在の不登校の状況として、6年児童3名が継続して登校していな

いが、スポーツ大会や学級のお楽しみ会など、不定期であるが行事に参加することができている。学級の人間関係が良好であることで、いつでも戻れる居場所となっていることから、取組の成果が表れていると感じている。

(2) 六戸中学校

本調査は、不登校やいじめを生まない、魅力のある学校づくりを目指して行われてきたが、本校は、昨年度、今年度ともに、いじめの認知は1件にとどまっている。また、不登校児童生徒については、昨年度は小中合わせて10人だったが、今年度は5人に減少した。しかし、不登校傾向を示す児童生徒数に減少の傾向はなく、今後も児童生徒一人一人に目を向け、魅力ある学校づくりに努めなければならないと感じている。不登校傾向のある児童生徒については、医学的要因など様々な要因が複合されていると考えられる事例も少なくないことから、不登校の結果的な数値に一喜一憂することなく、これまでの取組を継続して行っていきたいと考えている。

